

## 「居心地」を悪くする快樂

- 日常の中のカルチュラル・スタディーズ実践 -

川中 大輔

### 1. 乗客に「日本人」はいませんでした...

ある日、友人の家でお酒を飲みながら、テレビニュースを見ていると、飛行機墜落事故報道がなされた。そこでは、「お決まり」のように「乗客に日本人はいませんでした」という説明がなされ、次のニュースへと移った。そこで、私は友人に対し、「このニュース報道で困ってしまう人は誰だと思う？」と質問をした。友人は質問の趣旨が分からず、不可解な顔をしていた。

この答えの一つは、在日外国人だ。日本人ではないが、日本（語）のニュース報道でしか、情報を得られない人には、安否が気遣われる人が近くにいても、その方の安否情報を上記の「日本人」に限った報道では知り得ない。特に日本語しか使えない在日外国人には、たとえ「本国」の報道を受信できたとしても理解できず、安否情報を知るには飛行機会社の発表を待たなければならず、相当の時間を要することになる。

高度情報化社会と言われる現代、インターネットやデジタル放送などで、情報入手源も多様になっている。しかし、飛行機墜落事故報道での日本人に限った安否情報は、日本人以外の日本住人の存在を「無視」したものに他ならない。

### 2. 「カルチュラル・スタディーズする」ということ

カルチュラル・スタディーズ（以下、CS）の実践は、こうした文化の中の抑圧性／排除性／権力性を暴いていく営みと言っても良いだろう。換言すれば、「文化の中に潜む政治」を読み解き、問題を明らかにした上で、文化を通して「異議申し立て」していくこと、そしてその上で、異議申し立てする側／される側を架橋するコミュニケーションを育み、問題の解決を目指すことだと示せる。

この実践では、文化的なものに対して、「誰が、どんな影響を受けて、何のために、何によって、どんな立場で、語っているのか／描き出しているか／行っているか」を常に問い正していく（上野・毛利 [2000]）。時には表象（representation）の「形式」をも問題化する（分かりやすい例ではデジタルデバイド問題など）。筆者はこうした「問い」を参考にしつつ、日常的にメディアを読み解く際に、「何が語られていないのか（どういった視点が抜け落ちているのか）、それはなぜなのか？」、「今語られていることを素直に受け止めたら、どういった価値観が形成されるか？」といった問いを立てるようにしている。

もちろん CS の実践は、メディアを読み解くだけではない。「実践」という言葉の響きにあうような「メディア表現」の取り組みもある。本稿では詳細に紹介できないが、日本ではメルプロジェクト（<http://mell.jp/>）の活動が大変興味深い（東京大学情報学環メルプロジェクト編 [2003]）。自分たちで本や映像作品といったメディア作品を創りながら、その作品の中で自らが他者をどのように描き出

したのかを批判的に分析し、自分の「内」にある価値観を問うといった試みなどがある。CSの実践としてのメディア表現では、「異議申し立て」を提起するためのメディアを創ることもある(水越・吉見編[2003])。

なお、CSは「いわゆるメディア」だけを対象としているものではない。サウンドデモやパレードをしたり、ホームレスのダンボールハウスにペインティングしたりといった、直接的な「アクション」を伴う実践もある(毛利[2003])。毛利が取り組んでいるものとしては、RE/MAP(<http://remap.jp/>)の活動が特に面白いので、より「実践」的なものを志向する方はウェブサイトを参照して欲しい。

「CSの実践」と言っても、一括りにしづらいまでに幅広い。今回は紙幅の関係もあり、そうした目配りは十分にできないことをご容赦いただきたい。だからこそ、ここで注意したいことは、本稿で示されるのが「唯一の正しい実践(観)」ではないことだ。寧ろ、そうした「正しい」実践などCSでは定義しようもない。

### 3. 何が「書かれ」、それはどのように「読まれる」のか？

本稿で提示したようなCSの実践とASJが取り組み始めている「エコカル」の話を接続するとどうなるだろうか。例えば、政治的な 이슈 を取り上げたマンガの読み方として、次の二通りの「読み」をCSの実践としては示せる。

一つは、マンガに「描かれているもの」を読み解いていく上で明らかになる「書き」に表象される「政治」と向き合うという読み方。もう一つは、そのようなマンガが、どういった人々にどのように読まれているのかという「読み」に表象される「政治」と向き合うという読み方だ。後者は分析データが手元になく例示できないが、前者で分かりやすいものとしては、政治マンガにおける「女性のポジション」が問題化できよう。この問題については、様々な分析が可能であるが、込み入った議論となってしまうので、敢えて分かりやすい具体例を本稿では示したい。

例えば、テレビドラマ化もされた安童夕馬・朝基まさしの『クニミツの政』では、登場する女性の多くは男性を支える旧来の構図で登場する。また、少ないながらも登場する女性政治家も男性政治家を引き立てる位置でしか登場しない。こうした表象や、想定される読者層が男性であることは、政治を考えることや政治の世界における男性の中心性を表している。このように考えると、女性誌で政治マンガの連載が見受けられないことは象徴的なことであろう。政治を考えることや政治の世界において、女性は周縁的な位置しか占めていないのである。

ただし、こうした「文化の中に潜む政治」を制作者が意図的に表象していることは、そう多くない。グリスウォルド[1998]が「文化のダイヤモンド」(図1)として提示しているように、制作者(創り手)は現在の社会で妥当とされる価値観に基づいて(社会的文脈の影響を受けて)作品を創り出し、私たち(受け手)に提供しているに過ぎない。

しかし、無自覚だからといって看過できるものではない。寧ろ、その「無自覚さ」は社会で「当たり前」として認められているからに他ならず、その「当たり前さ」故に受け手もまた埋め込まれた現実の価値観を受け取り、その価値観を補強していきやすい(もちろん、創り手の表象を完全に受け手が受け取るとは限らない)。CSの持つ力はこうした潜在的な部分において、最も発揮される。

もちろん、「政治性」に配慮した作品を自らの手で創り出すことを通じて、既存の創り手の作品の「問題点」を浮き立たせることもまた、前節で述べたようにCSの実践と言える。

なお、こうした実践は、個人的な営みとして閉じてはその「可能性」を狭める。自らの「読み／書き」を他者の「読み／書き」と交差させるところに立ち上がる私たち「内部」の問題に気づいていくことこそ、深く「政治」や「社会」と向き合うことになるからだ。

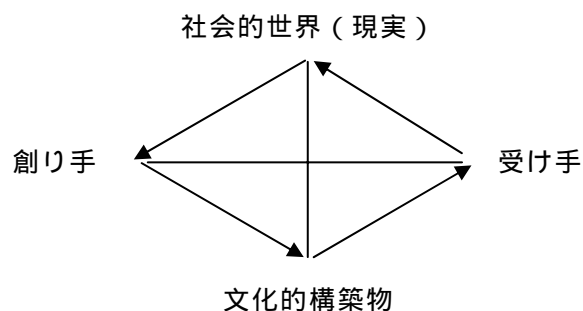


図1 文化のダイヤモンド

#### 4. 敢えて「居心地」を悪くする

CSの実践は既存の「秩序」を問うものであり、異議申し立てされる側にとって、「居心地」悪いものだ。また、異議申し立てする側にとっても、自らのCSの実践に対する他者の「異議申し立て」の可能性に絶えず晒されており、落ち着けず、「居心地」が悪い。異議申し立てする側だけに安穩と留まることはCSでは許されえない。CSの「異議申し立て」は常に自分へも向いてくる。

1996年に英国からCS研究者を招いて行われた「カルチュラル・スタディーズとの対話」というシンポジウムでは、様々な「異議申し立て」が飛び交う、ある種の「喧騒」の中で幕が閉じられていった(花田・吉見・スパークス編[1999])。こうした「喧騒」は普通に考えれば、「良くない」ものであろう。しかし、上述の通り、CS実践者は「居心地」悪さを引き受けて、こうした「喧騒」を歓迎する。なぜなら、同時に複数の「独立した」声が響きあうことは、単一の「真正的なもの」の支配を拒み、そういったものを「揺らがせる」ことに他ならないからだ。

CSの実践は、常にラディカルであり続けようとする。故に「心地よい安定」など似合わない。しかし、だからこそエキサイティングな「快樂」をもたらしてくれる。

#### 参考文献

- 阿部潔・難波功士編 2004 『メディア文化を読み解く技法 - カルチュラル・スタディーズ・ジャパン - 』世界思想社
- 岩淵功一・多田治・田中康博編 2004 『沖縄に立ちすくむ - 大学を超えて深化する知 - 』せりか書房
- 上野俊哉・毛利嘉孝 2000 『カルチュラル・スタディーズ入門』ちくま新書
- W.グリスウォルド(小沢一彦訳) 1998 『文化のダイヤモンド』玉川大学出版部
- 東京大学情報学環メルプロジェクト編 2003 『メルの環 - メディア表現、学びとリテラシー - 』トランスアート
- 花田達朗、吉見俊哉、コリン・スパークス編 1999 『カルチュラル・スタディーズとの対話』新曜社
- ポール・ドゥ・ゲイ他(暮沢剛巳訳) 2000 『実践カルチュラル・スタディーズ - ソニー・ウォークマンの戦略 - 』大修館書店

水越伸・吉見俊哉編 2003 『メディア・プラクティス - 媒体を創って世界を変える - 』せりか書房  
毛利嘉孝 2003 『文化 = 政治』月曜社  
『週刊読書人』第 2289 号「書評特集 カルチュラル・スタディーズ」読書人、1999 年 6 月 18 日  
『Stage』vol.10「特集 メディア?メディア!?メディア!!」メディア・ガレッジ、2002 年

( A SEED JAPAN 理事・立教大学大学院 )